

SK 1 出土遺物（図4－3、4）

3、4はいずれもSK 1の埋土中から出土しました。3は、平瓦で、全体の2/3 程残存しています。全面を工具でナデ調整し仕上げています。完存していませんが、長方形を呈し、17世紀の製作とみられます。4は、備前焼の大甕の頸部から口縁部にかけての破片です。復元口径は62.4cm を測ります。内外面ともに6本/cm のハケで調整しています。外面は凹線が3条入り、口縁部は折り返して貼付け成形します。口縁形態等の特徴から慶長12年年銘大甕（備前焼紀年銘土型調査委員会1998）に類似しており、17世紀初頭の大甕と考えられます。

<遺構外出土>

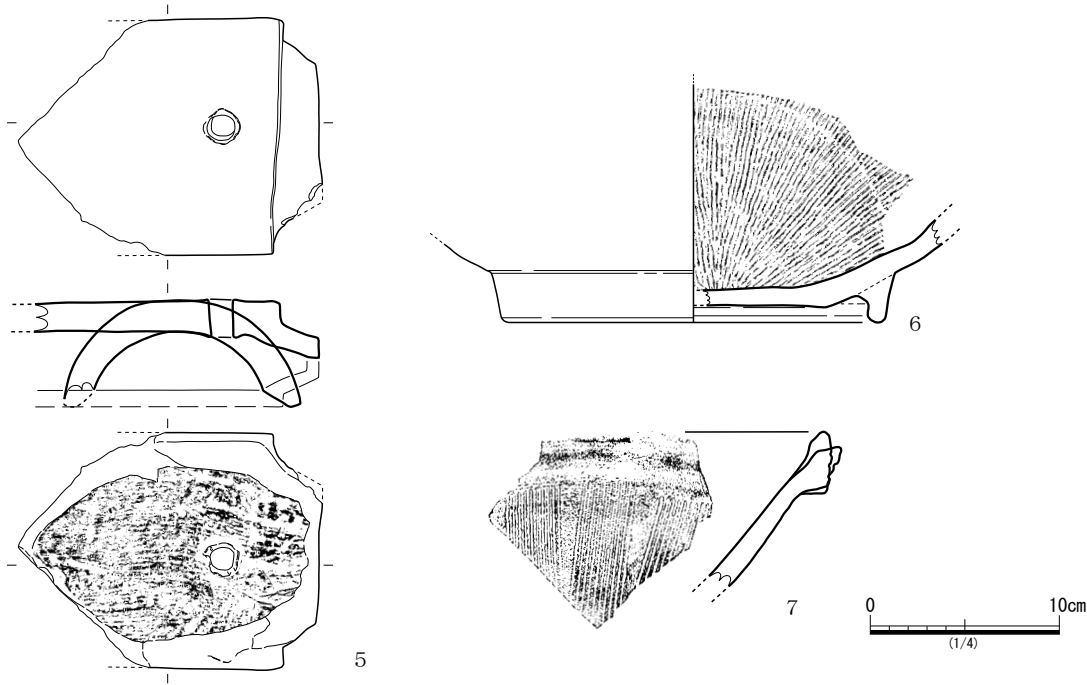


図5 遺構外表採遺物（S=1/4）

遺構外表採遺物（図5－5～7）

5～7はいずれも調査区内で表採した遺物です。5は、玉縁式丸瓦片です。1/3 程度残存し、幅は12.5cm 、径1.4cm の釘穴が穿たれています。内面は、縄目が長辺方向に入り、玉縁部のややすばまる箇所はシボリ調整します。6は、備前焼の播鉢片です。底部1/3 程度残存し、復元底径9.5cm を測ります。口縁形態は不明であるが、底部形態およびスリメの特徴から、乗岡編年（乗岡2002）の近世3期以降のものと考えられます。7は、播鉢の口縁部片です。口縁部に凹線が3条入ります。スリメは、放射方向に間隔をもちながら口縁に近い位置まで施しています。胎土や色調の特徴から明石産の可能性があります。

まとめ

本発掘調査では、調査区内のほとんどが改変を受けており、町屋を示す痕跡を確認することができませんでした。しかし、当該期の屋敷の区割りや土地の状況を示した、「岡山城下町絵図」など古図や絵図の文献では確認することができない、土塁の一部やその下部の地中にある瓦樋の存在など、三之曲輪整備に伴う土木工事の一端を掴むことができる重要な成果を得ることができました。特に、この瓦樋は、遺構の検出状況および遺物の製作年代から宇喜多秀家期の岡山城外郭造成段階の遺構と評価でき、数少ない宇喜多期の遺構を確認できたという点でも重要な成果といえます。

1）乗岡実氏の教示による。このほかの遺物も実見いただき、年代観や製作技法の所見をいただきました。

参考文献

乗岡実 2002 「近世備前焼播鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会
備前焼紀年銘土型調査委員会・備前市教育委員会 1998 『備前焼紀年銘土型調査報告書』

岡山城三之曲輪跡

所在地 岡山市北区表町一丁目

時代 近世～近代

調査期間 20250707 ～ 20250708

調査面積 約190 m²

遺跡の概要

岡山城三之曲輪は、岡山城本丸西側の内堀と中堀に囲まれた一帯を指しており、岡山城の外郭にあたります。宇喜多秀家による近世城郭への工事着手に伴い、城郭配置の一端として整備されました。絵図や古図によれば、三之曲輪は、町人町にあてられています。そのほか、東側の京橋御門と南側の郭の外堀沿いに設けられた平門2棟と木戸9棟の外には、櫓や土塀等の城郭施設を欠き、外周側面が土塁築盛であったことが明らかになっています。シンフォニーホール建築に伴う調査では、内堀の石垣を検出したほか、三之曲輪内で16世紀末から17世紀前半を中心とした屋敷地関連の遺構が見つかっています。

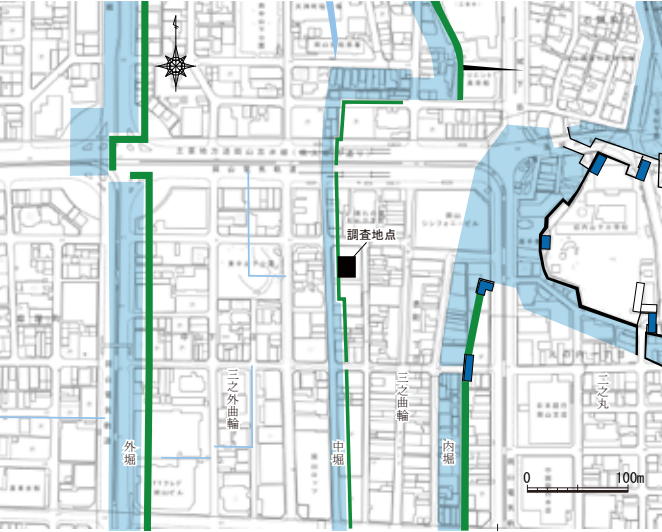


図1 調査地点の位置と城下図（1/7500）

調査の概要

今回の調査は、三之曲輪の北西部にあたり、南北にのびる中堀に隣接する地点です。当調査地点は、過去にビルが存在しており、一部、地下にも構造物がありました。このため発掘調査は、改変を受けてないとされる部分に、南北方向16m、東西方向12mのトレンチを設定し、進めました（図2）。

発掘調査の成果としては、町屋造成に関わる「瓦樋」および土塁の残存部分を検出しました（図3）。瓦樋は、排水管の役割をもち、敷設の際の掘り方がみられないことから、曲輪の造成以前に整備されたものと考えられます。また、瓦樋の下部に木材を敷き、樋が自重で沈まないように工夫した痕跡がみられました。土塁に関しては、瓦樋を挟むように木杭を打ったのち、盛土をして形成したとみられます。土塁の高さについては、後世に削平を受け、判然としません。そのほか、標高2.5m地点で曲輪整備土の一部を確認したが、それより下層では近世以前の遺構や遺物は見られず、当地が近世以降に開発が進んだことが判明しました。砂だまり（SK1）については、改変により正確な規模は捉えられないものの、粗い砂や細かい砂、粘土が混じり埋待っていました。内部には、平瓦の混入がみられるものの、時期は明確に捉えることができませんでした。砂だまり遺構（SK1）の性格としては、岡山城三之曲輪や三之外曲輪の発掘調査の際にしばしばみられる、洪水の片付け穴の可能性が考えられます。



写真1 調査区写真（北西から）

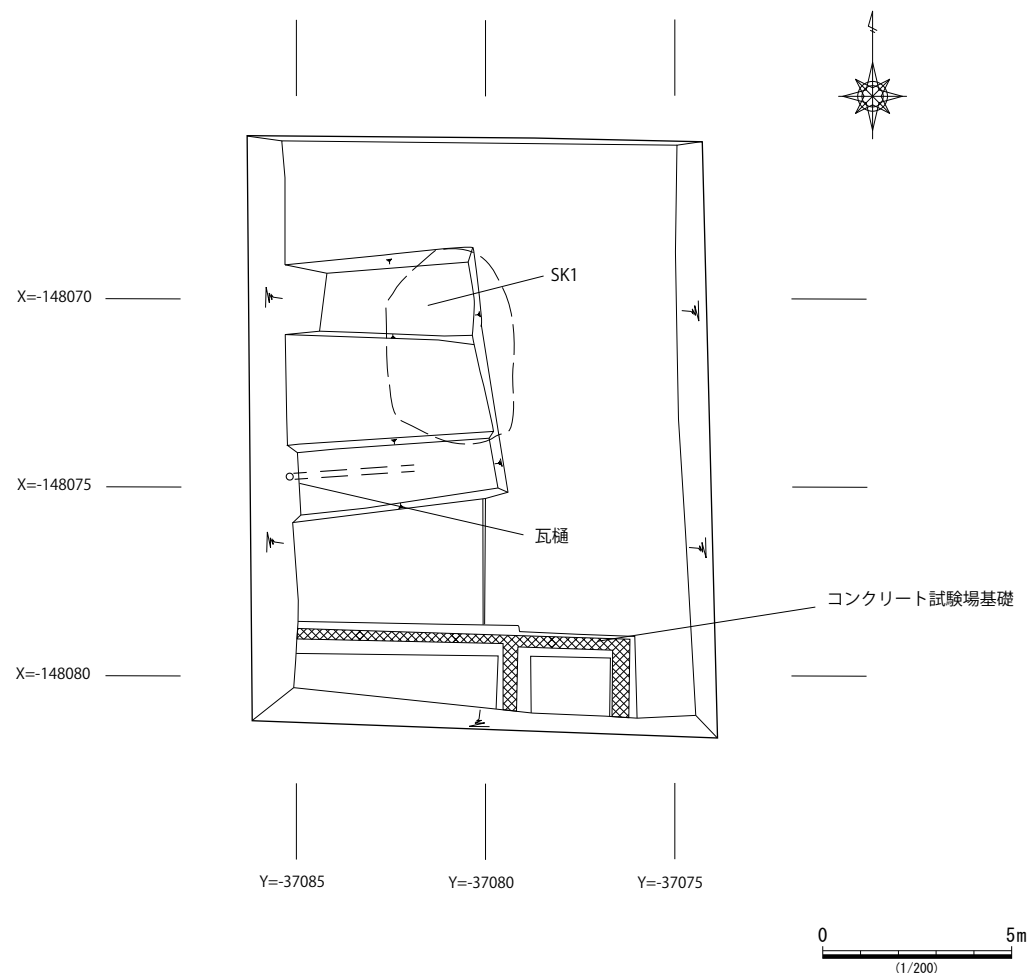
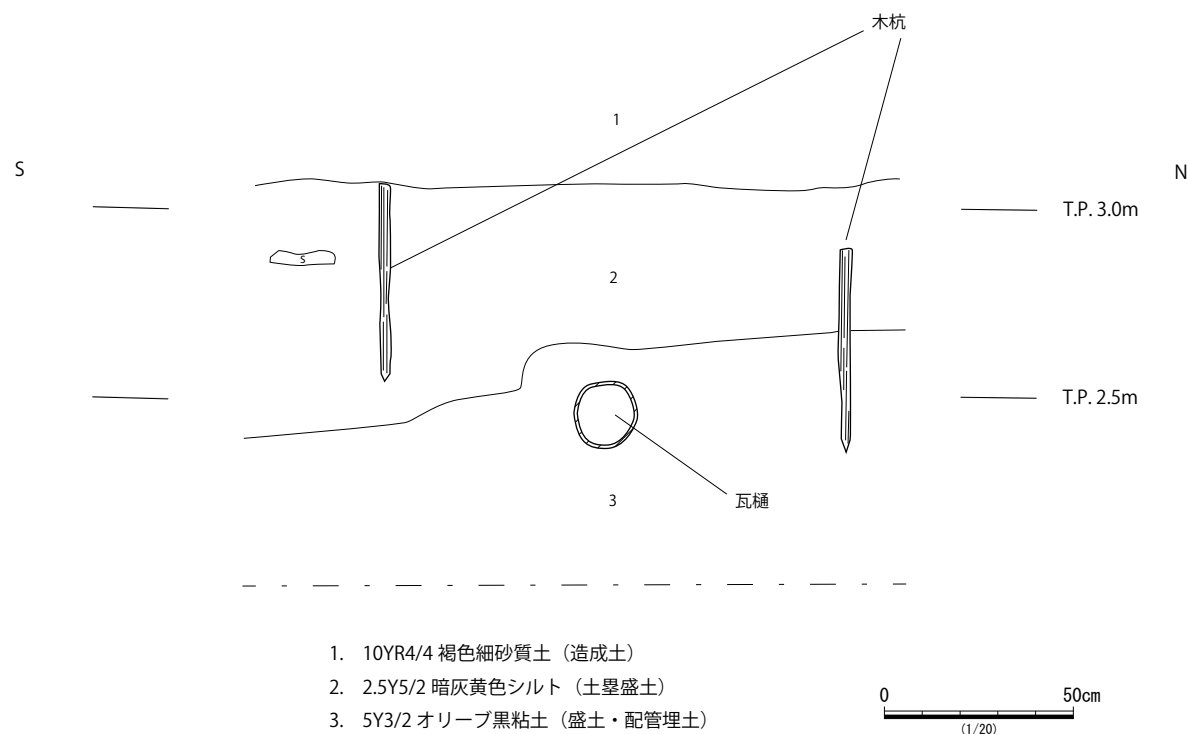


図2 遺構の全体図 (1/200)



1. 10YR4/4 褐色細砂質土 (造成土)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト (土塁盛土)
3. 5Y3/2 オリーブ黒粘土 (盛土・配管埋土)

図3 瓦樋断面図 (1/20)

出土遺物

今回の調査では、調査区全体からコンテナ1箱分の遺物が出土しました。遺物の内容は、瓦類、備前焼、陶器類が挙げられます。

瓦樋 (図4-1、2)

1、2はいずれも瓦樋を構成する部材で、瓦質で玉縁式丸瓦を重ね合わせた形状で筒形を呈します。1は、ほぼ完形で、口径16.5cm、玉縁部径11.6cmを測る。外面に木材が残存しています。内面は、糸切のコビキ痕が明瞭に残り、コビキA類が広くみられます。両端部はヘラケズリで調整しています。また、内面の一部には、コビキ痕のほかに幅5mm程度の釣紐の痕跡がみられます。2は、胴部が1/3程残存しています。外面は木材が剥離した痕跡が僅かに確認できます。内面はコビキA類の痕跡が残り、幅5mm程度の釣紐の痕跡がみられます。1、2とも外面に木片がつき、この木材は瓦樋材を連結して設置する際に瓦樋材の下に敷いた木材の一部と考えられます。瓦樋の部材1、2はいずれも、製作技法から下限が慶長6年とみられます¹⁾。この年代観は内堀と三之曲輪の造成段階とは矛盾しません。

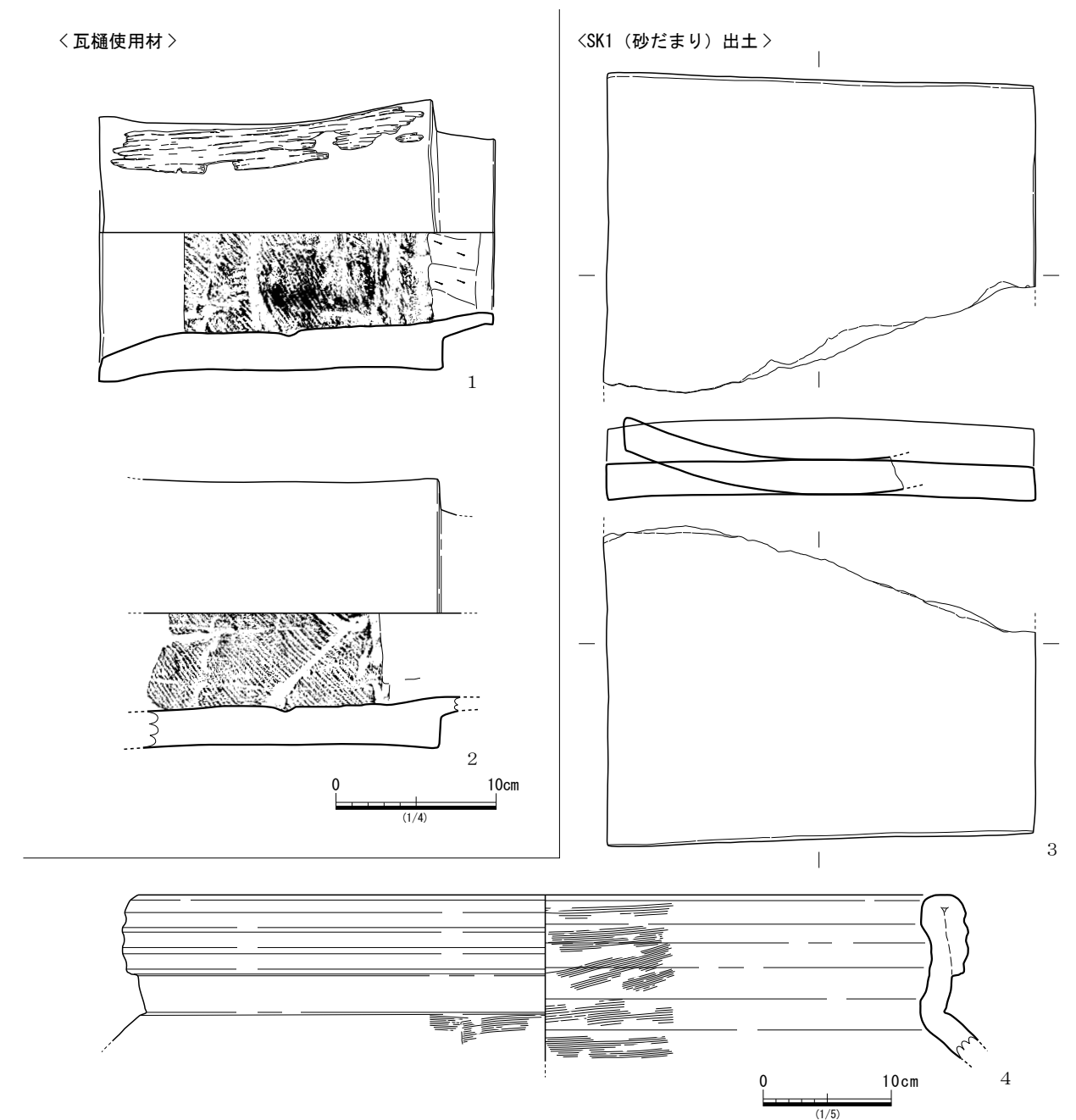


図4 遺構出土遺物 (瓦樋・SK 1) ※4のみ S=1/5